

十年以上前より妻や子供達は、大の益子焼（マシコヤキ）ファンで毎年春と秋の二回、益子焼展示即売会（お祭り）に殆ど欠かさず出掛けていた。レジャーを兼ね楽しみながら行く。

私も四・五回行った、ハイウエー、宇都宮で一般道に出て約一時間栃木県の東南益子町の会場に着く。益子焼が有名になったのは、昭和の初期陶祖の窯元が人間国宝になった時からだそうだ。

私は瀬戸物（？）にはあまり興味がない、もっぱら、動物の置物が好きで、取わけ狸の置物が気に入り買って来る。何時も食器類は買わず置物ばかり、妻や子供達に呆れられていた。

一昨年村田町の妹が店舗付き住宅を新築した時、私が電気工事を頼まれ、相場の半値位で完成させ、そのお祝いに、益子焼の狸の置物を持って行った。狸のヒョウキンな面が何とも言えない。妹の店に寄ると、入り口の棚の上で手（？）に徳利と、大福帳をもって済ました図体で迎えてくれる。

狸の前には益子の店で買った狸の縁起よい謂れなど書いたB四の紙が貼つてある。狸は（他抜き）に例えられ商店には喜ばれる置物である。我が家の玄関にも置いてある。

平成十年四月末日、日頃から妻が行って見たいと言っていた、群馬県東村にある村立富弘（トミヒロ）美術館に、益子焼見物の後、二男が運転する車で三人だけだが一泊で行く事にした。

益子焼見物の時は何時も朝三時頃出発する。七時頃到着、八時頃から陶器市の見物と気に入った品を買い、益子焼会場の近くで昼食、富弘美術館に向つた。

途中、電気店開業時のお得意さんで、鹿沼市に転居した渡辺清作宅を訪問、お土産に米一俵（三十キロ）進呈した。三十分程お茶をご馳走になり、在仙時代の四方山話に花を咲かせ、再会を約束してお別れした。

予定では日光の近くを通り、足尾銅山の町を経て南下、富弘美術館に行くつもりだったが、渡辺さんの進言で近道の山道を行く事にした、三角形の一边位の距離だと言う。日は長いし天気も良

い、ピクニックの様なな気分で行田舎道をはしり山道に差し掛かった。

山道で一先に二度とお目にかかれない光景に出会った。峠を越え曲がりくねった道を下っていたら、道路の真ん中を猿が悠長に歩いて居るではないか、車が近づいても驚きもせず、悠悠急な切道しを登り山の中に消えていった。親子三人大笑いだっただ。

3時頃東村に到着、早速美術館に入った。妻が行って見たいと言った事が頷かれる。東村出身で星野富弘さんという人が大学を卒業後、中学の先生になった。赴任二・三ヶ後、クラブ活動の時に高飛びの着地に失敗し、背骨を痛め入院加療したが、頭以外不随になってしまった。

三年余り入院、退院したが手足が動かない。正常なのは頭だけである、苦心さんたん、車椅子の操作を口で行う。字や絵を書くにも筆を口にくわえさせてもらい書く。

書いた絵に詩が添えてあり、その作品が展示してある。涙なくしては見られない。ビデオルームで、星野富弘の人となりを見ることが出来た。

館外に出るとすぐ前は草木湖である。ダムを築いて出来た山間



の人造湖だ。新緑の季節になったばかり、湖面を渡ってくる風が清々しい、上着を脱いでの見物だった。

美術館を出て、草木ドライブインに入りコーヒーを飲み休憩、ダム管理事務所前の庭や、高い堤防で思い出の写真を撮り草木湖の真ん中に架かっている、アーチ状になった長い橋から噴水を見



ながら対岸にある宿に向った。

宿は二男がインターネットで予約してある“国民宿舎サンレイク草木”である。私達親子には充分過ぎる程の宿でホテル並だ。夕食後売店でおもいおもいにお土産を買った。私は“星野富弘詩画集絵はがき”を約百枚買い、妻は額縁に入った作品を求めた。翌日足尾銅山の町と、日光東照宮サイドを経て東北道に入り帰った。美術館には他に行つた事が無かつたから、感激が新鮮な記憶として残っている。

私は誌画集と写真で一冊のアルバムを作った。額縁は居間に飾つてある。どちらも家宝といつていい思い出の品々である。